

最近の小説

(その十四)

講談倶楽部の最期

武蔵野次郎

講談社の看板雑誌である。五十年の歴史をもつ講談倶楽部がいよいよ十二月号で廃刊となつた。ほちよつと淋しいことである。ここに戦前の講談倶楽部はかたまりをなしていった。新人の作目も意欲的にとりあげていった。ただけに、クラブ雑誌は売れないうちの理由で姿を消さざるを得ないとした。惜しいことである。週刊朝日で報いていたが、講談倶楽部という十日めかしの誌名のために、寄稿しない作家が多くあったから、これを廃刊して新しい雑誌に天日えるのだ。ところが、そんなこともない。唐宛の廃刊は何かも繰り返すようだが、惜しまれる。昭和初期の講談社華やかになりしときの大雑誌キング、富士、講談倶楽部とマ

のには戦後バクモないが少年倶楽部、少女倶楽部、決くなつた。ついでに戦前の